

□ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなもひらがなで書くこと。また、その漢字を使った二字熟語を答えなさい。
任務をマツトウする

問二 次の漢字の二つの訓読みを例のように送りがなを区別して、ひらがなで答えなさい。

(例) 通 かよ—う・とお—る)
強

問三 次のように言葉をリレーしていく場合、□に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

温厚 ↓ 厚 □ ↓ □ 色 ↓ 色 □ ↓ □ 面

問四 次の文は「刷」という漢字を漢和字典で探すときの方法をまとめたものです。解答欄の指示に従って答えなさい。

「刷」の音は□1であるので、音訓さくいで引けるが、部首さくいんでは□2のところを引けばよい。また、総画数は□3画となる。

問五 次の四字熟語の意味を選びなさい。

意味深長
ア、言葉で表されているほかに別の意味もあること
イ、言葉が多くの意味を持つと使い方に迷うこと
ウ、言葉の意味を探ると理解が深まること
エ、言葉は意味を深く考えて使わなくてはいけないこと

問六 次の慣用句の□に二度入る漢字を一つ選びなさい。

① □が高い ② □が立つ
③ □が合う ④ □が肥える
⑤ □が出る

手・息・顔・足・目

問七 次の——線の言葉はどこにかかるか選びなさい。

昨日、弟は①遅く②帰宅したことを③母に④きつく⑤しかられた。

問八 次の——線のカタカナを漢字二字に直しなさい。

シンプルな構成

問九 次の○の部分は何画目ですか。漢数字で答えなさい。

1 座 2 必

③ 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

われわれは教育で、少しずつごく日常で使う言葉以外のいろんな言葉を覚えていくのだけど、自分を理解するのに必要な言葉がたまってくるとは、ふつうは高校から大学にかけてです。象徴的に言えば、それは「批評する言葉」としてたまっていく。

中学、高校くらいになると、誰でも、まず親に対して批判的になって、批判の言葉を持ちます。お母さんはいつも口うるさいけど、自分はきまぐれだとか、お父さんはいつも威張っているけどほんとには気が小さい、とか考えるようになる。

子供は、自分はまだ親に養われていて一人前ではないのだけど、周りのいろんなことを批判する言葉を持ち始める。①これがいわば人間の心の「自由」の開始点です。哲学ではこれを「自己意識の自由」と言います。「自己意識」の内側では自分のまわりのどんなことも批判できる。でも、まだ言葉が十分に成熟しないあいだは、子供の「批判」は、単なるA、つまりこれこれは「気に入らない」、です。

中学生や高校生どうしでは、趣味があうことが大事で、趣味があうと友達になれる。「私、椎名林檎、好き」「うそ、私も大好き！ やったー！」「あの映画見た？ めっちゃよかったよね？」「うんすごーく、よかったー！」「でも、私、あれは嫌い、ダサーい！」「そう、私も。超ダサーい！」。これが中学、高校生の趣味的「批判」ごっこです。好き嫌いがあふだけの批判です。

しかし、大学生くらいになると、②「批判」はすこしずつ「批評」になってゆく。「私、あの音楽大好き、なぜって、ここのフレーズとこの歌詞がぴったりあっているんだ」「あー、わかる、だけど、ちょっとイントロはゆ

るくない？」

「批評」は、単なる「好き嫌いの批判」ではなく、好きときらいの理由が入っています。好き嫌いの理由がちゃんと言えるようになると、趣味は「批評」に近づく。で友だちづきあいも、単に好きな者どうしではなく、③趣味の違いが許容できるつきあいになる。つまり、趣味自体よりも、美意識をちゃんともっているかどうかが問題になります。ともあれ、このことがとても大事だが、「批評」ができるには「言葉」がたまらないといけない。

友だちどうしで「批評」がしあえる、というのは、じつは、互いに「自己ルール」を交換しあっているということです。「自己ルール」とは、その人がいつの間にか身につけている「よいー悪い」のルール、また「美醜」のルールです。「美醜のルール」は簡単に言うと、各人が身につけた美的センス、美意識です。自己ロマンの強い人は、美醜のルールが強く形成される傾向がある。

ともあれ、高校くらいまでに、人間は、自分の「よいーわるい」と「美醜」のルールを形成していく。で、「自己意識」が強くなるにしたがつて、それでいろんなものを「批判」（趣味判断）するようになる。でも、大事なのは、いろんなものを「批評」しあうことで、友だちと自分の「自己ルール」を交換しあい、確かめあい、そしてそのことでそれを調整しあっていくということです。

（中略）

じつは、友だちとのこういった「批評」しあう関係によつてしか、人は、自分の「自己ルール」を理解することはできません。よく、「他人こそは自分を写す鏡だ」と言います。人間は他人を通してしか自分を理解することはできない、と。その通りですが、その意味を、哲学的に言うところ

んな具合になります。

われわれは誰でも、自分だけの善悪・美醜の「自己ルール」を、いわば感受性のメガネとしてかけている。そしてそれは長い時間をかけて形成されたもので、誰もこのメガネを外すことはできない。もし青いメガネをかけていたら、すべてが青っぽく見える。メガネのレンズが少しゆがんでいたら、すべてが歪んで見える。でも、われわれがこのメガネを外せないなら、それがわれわれにとつては「正常な」世界です。

B ふつうは、自分のメガネが歪んでいるのか、色がついているのか、誰にも決して分からない。このことに気がつくのは、他人がみているものと、自分が見ているものとの違い、偏りに気づくときだけです。これを「視線の偏差」とか「視差」と言います。

もしわれわれが、自分の好き嫌い、つまり趣味判断だけで生きていれば、「自己ルール」の形がどうなっているのか、理解することはできない。「批評」しあうことではじめて、人は自分の「良し悪し・美醜」のルールが他人と違うことに気づき、またそれを交換することができるのです。

もちろん、他の人もみな自分の「自己ルール」を自分のメガネとしてかけている。だから、例えば相手の感受性や美意識が「正しい」とはかぎらない。厳密に言うと、すべての人が自分なりの「メガネ」をかけているので、絶対に正しい「メガネ」というものはないのです。

C、われわれは相互の批評を通して、さまざまな人の「自己ルール」と自分の「自己ルール」との偏差を少しずつ理解し、そのことではじめて自分の「自己ルール」の大きな傾向性や問題性を了解することができるわけです。

〔竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』〕

問一 — 線①の指示している内容を文中から二十五字以内で探し、最初の五字を抜き出さない。

問二 — Aに入る四字熟語を選びなさい。

ア、自己満足 イ、中途半端 ウ、不平不満 エ、無理難題

問三 — 線②にある「批判」と「批評」の違いを答えなさい。

問四 — 線③の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、自分の趣味をもち自己意識の違いを許しあえるつきあい
イ、自分の美意識をもち好き嫌いの違いを認めあえるつきあい
ウ、自分のルールをもち美意識の違いを言いあえるつきあい
エ、自分の感受性をもち自己ルールの違いを批判しあえるつきあい

問五 — 線④と似たような意味を持つものをすべて選びなさい。

ア、他山の石
イ、遠くの親戚より近くの他人
ウ、人は見かけによらぬもの
エ、人の振り見て我が振り直せ
オ、良薬は口に苦し

問六 — 線⑤の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、人は長い時間をかけその人なりの感受性のメガネ、つまり「自己ルール」を作り上げた結果、それを通して判断に間違いがあるはずはないと思っているから。

イ、人は誰でも自分の感受性のメガネを通して見える世界、いわば「自己ルール」に支配された世界を正しいと信じていることが他人の批評に對抗する力になると知っているから。

ウ、人は感受性のメガネを間違った状態で長い時間かけ続けると、むしろその状態であることが楽に思え「自己ルール」での判断の誤りに気付けなくなってしまうから。

エ、人は自分の感受性のメガネを通して見える世界が人と異なることを恐れ、ようやく形成した「自己ルール」を正しいと思い込まなければ生きていけないから。

問七 B・Cに入る語句の組み合わせとして最も適切なものを選びなさい。

ア、そして—だから

イ、つまり—しかし

ウ、だから—そこで

エ、ところで—つまり

Ⅲ 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の音和は、両親の離婚により二学期から転校した。父は映像の編集や画像処理の高度な技術者で経営者でもあったが、事業に失敗し、通俗的だと批判していた伯父のフォトスタジオで働いている。ぜいたくな都心での生活から一転して、音和は父とみすばらしいアパート暮らしをするはめになってしまった。しかし、新しく担任となった河井の勧めで新聞部に入部し、伝書鳩を育てる仲間たちと出会い、音和の心は少しずつ変化してきた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に梅雨の晩のことを思い出させた。ただ、今の父には崖っぷちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。

「伯父さんに電話しようと思って、」

音和は気負いながらそう云った。河井に泣きごとを云わないときめたあとで、彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった。

「なんの用で？」

「だって、こんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もつとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ぼくにもできる。……だから、ぼくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」

伯父に電話をしようとしたときの音和は、父への不当なあつかいに

問八 — 線⑥とはどういうことですか。「自己ルール」という言葉を用いて説明しなさい。

問九 文中で筆者は自分を知るためにどのようなことが大切だと述べていますか。二十字程度でまとめなさい。

問十 あなたは友だちづきあいでは相手と自分の「自己ルール」の違いに気付いたときどのような行動をとるべきだと思いますか。筆者の考えをもとに自分の考えを述べなさい。

抗議することしか考えていなかった。自分にも何かができるとは思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまつすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。

父は笑みを浮かべた。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。いつのまにか傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚がはげしくなる。だが、その雨はこちよかった。

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かごの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単な防水加工をしてあるが、雨はそれ以上にふっていた。

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらでほほを拭いながら父にたずねた。

「たぶん、」

父は笑顔でこたえ、帰ろう、と音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあけく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、ようやく遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間、大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声がした。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままなのに気づき、あわてて片づけた。こっそり手つだおうとしていたのに、きまりが悪かった。

「心配をかけて、すまなかった。でも、私は平気だから。おまえもよいなことではある。自分のことに集中してる。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに、伯父さんにたいしては。」

いつもの父の意地がでる。

(中略)

「ほくにもきようだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかったと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかあさんと暮らしたいと云ったら、おまえも向こうへいったんだらうな。」

「そのほうがよかった？」

「私が訊いているんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだろう？」

「……ほくは、」

この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ちだした両親に腹をたて、意地をはって、好きでもない父といっしょに暮らすのだと思いいましたし、態度にもあらわした音和だったが、かつてのぜいたくさのかけらもないいまの暮らしが、さほど苦にならないのは、身近になった父が、ありのままの姿を示してくれるからだだった。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かつこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしたした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめたことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザインを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝る必要はないと云いっつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果があがったとはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの製作費を給料からさしひくと云われた。」

「筋は通ってるね、」

父は軽快な笑い声をたてた。「なまいき云ってないで、もう寝ろ。」

音和はたたみの部屋に布団を敷いた。屋のあいだに祖母がきて、日にあてておいてくれた布団は、まだ温かさがのこっていた。音和はほほをあてながら、声をはずませて父をよんだ。

「おとうさん、この布団、ひなたの匂いがするんだよ。」

「……それが、うれしいのか？」

「うん、うれしい。すごく気持ちがいい。」

「もつとはやく知れたかったよ。おまえをよろこばせるのが、そんなに安あがりなことだったとはね。」

⑥「ほくも、ひなたの匂いがこんなにいいものだなんて思わなかった。」

音和は、しばらく布団にうつぶせていた。

(長野まゆみ『野川』)

問一 — 線①とはどのようなことですか。具体的に答えなさい。

問二 — 線②の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、伯父のところで生活のためにやりたくもない仕事をがんばっている父の姿を見て、自分にも手つたえることがあると感じたから。

イ、伯父の父に対するあつかいがあまりにひどいので、自分が少しでも手つだってあげないと父がたおれてしまいそうだから。

ウ、伯父と父は昔から兄弟げんかばかりしているため、自分が仲裁したほうが父に対するあつかいが良くなると考えたから。

エ、伯父の不当なあつかいに耐え、雨にぬれてまで必死に働く父に負けないように、自分も泣きごとを云わないと決めたから。

問三 — 線③の理由を説明しなさい。

問四 — 線④とはどのようなことですか。

問五 — 線⑤の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、何もかも失った父を支えるのは自分しかないといえと氣をはって暮らしてきたので、元氣になった父に安心したから。

イ、いまの父の姿を見たら、母も離婚しなかったかもしれないと思うと親子三人の暮らしに戻りたくなかったから。

ウ、父といっしょに暮らすことに決めたことを後悔して、反抗的な態度をとっていた自分が情けなかったから。

エ、自分の素直な気持ちを父に伝えることができ、父もその気持ちを受け止めてくれてうれしかったから。

問六 この場面の季節はいつですか。文中からその根拠となる表現を一文で探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問七 伯父はどのような人だと思われますか。最も適切なものを選びなさい。

ア、父のことを本気で心配して、早く元の生活に戻ることができるよう社会の厳しさを教え込もうとしている人。

イ、父の技術は信用しているが、兄だから仕方なく面倒を見てやっているのだという横柄などところのある人。

ウ、兄として父の窮地に手をさしのべる良識があり、商人としての合理的な判断のできる人。

エ、父の提案を一度は否定したものの、すぐに承認してくれるような物事を柔軟に考えられる人。

問八 — 線⑥に込められている気持ちを自分の言葉で説明しなさい。

(注意) ※印の所には記入しないこと

合 計	
--------	--

